

四、滑稽俳句の実際（その二）

河村正浩

蚊も寄つてこないといふ木ふと不憫 後藤比奈夫

後藤比奈夫は大正六年生まれ、ご健在である。ゆっくりと世の中を見ておられる高齢者俳人の温雅の世界。

使ひ捨て懐炉死ねば即座に剥がさるる 栗林千津

老衰に夏瘦せ加はりどもならん 阿部みどり女

敬老日ビーフステーキミディアムに 鈴木真砂女

何れも故人だが、九十歳を越えた老俳人のしたたかさである。あるのは今の今だけである。こうした作品を見ると、人生経験の豊富な人ほど優れた俳諧味ある俳句が詠めるということである。

秋風につかまつてゐる遠たふみ 松澤 昭

渾身の闇をつくりぬ露葎 藤田湘子

種茄子となるべき彼を放任す 上田五千石

嘗ての大御所。この中で松澤は心象造型を提唱。何れも意外性から汲み取れる面白さ、つまり季語と比喻が相乗しながら読み手にイメージを促す。又、作者の心象がイメージとなって別の詩的眞実を造型する。これらもまた俳諧味ある作品である。

神棚に忌と張り紙を菓喰 茨木和生

風土性作家らしいユーモア。

瀧壺に瀧活けてある眺めかな 中原道夫

瀧を生け花のように見立てた独自の発想。他に〈飛込の途中たましひ遅れけり〉というユニークな作品もある。

寒風や発火しさうな猿の尻 大木あまり
誇張の面白さ。

重き尻ざぶんと鴨の降りにけり 阿波野青畝
クローズアップ且つスローモーション的映像。

破れ笠十も開けば降りだしぬ 林 菊枝
季語の持つ言葉のイメージを上手く捉えた。

このように写生句にも佳句は多い。

旅に出た笹舟帰るところなし たむらのぶゆき

〈海に出て木枯帰るところなし 誓子〉の本歌取り。先人の句の一部を取り入れ余情を豊かにする修辞法。嘗て俳諧でも頻用された。この句についてのコメントは避けるが、安易に手を出すと類似に終る。以前に次のような句を読んだことがある。

着膨れて爪切る足が遠すぎる

六月に来た犬ジュンと名付けらる

いずれも、一見、滑稽俳句として申し分ないように思えるが、よく見ると、ただの報告に終わっている（散文的）。初心の内は頭で意味を考え、意味を取り入れようとする。すると常識が働く。「着膨れた〈だから〉足の爪を切るのに手が届きにくい」「六月に来た犬〈だから〉ジュン（June）と名付けた」。解釈すると以上のようなになる。つまり、季語と以下のフレーズが「理由と結果」の意味でつながり、「だから」が接着剤となっている。故に散文的であり、言いたいことを言ってしまうので、一読してなるほどとは思うものの「あっそう」で終わってしまう。